

科目名	単位数	指導学年・類・型	必修・選択
物理基礎	2	1年・2類	必修
授業担当者	教科書名	副教材等	
****	第一学習社 『高等学校 新物理基礎』	第一学習社『2023 新課程版 セミナー物理基礎』 授業ノート（プリント）	

科目の到達目標
自然現象を正しく認識する上で必要な物理的概念や原理・法則を知らせ、自然現象を主に数式で理解する能力を養う。

評価の観点と方法について
成績：中間考査・期末考査を実施し、これを80点に換算して、残り20点はその他の資料（各種提出物、授業態度等）として100点満点とする。
知識・技能：物理の基礎知識を理解し、課題を処理できる技能があるかを、主に問題集のプロセス、基本例題、基本問題の理解度で評価する。
思考・判断・表現：主に問題集の基本問題、発展例題、発展問題の演習に取り組み、適切に理解しているかどうかで評価する。また初見の入試問題などに対応し解答できるかで評価する。
主体的に学習に取り組む態度：提出物の内容、授業態度で評価する。

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
一学期	4	物理量の測定と表し方	物理量の定義と有効数字を理解する。	物理量とは、「単位まで含めた量」であり、測定や計算によって得られる量であることを知る。	定義を理解する。
	5	速度と加速度	物体の運動を変位、速度、加速度という観点から理解する。	生徒の理解しやすい平均の速さから入り $x-t$ グラフ、 $v-t$ グラフや作図等を用いながら、様々な運動について、ある時刻における座標、速度、加速度を求めていく。	問題集の問題を解くことができること。
		(中間考査) 落下運動	等加速度直線運動として落下運動を理解する。	重力加速度の大きさを求め、等加速度直線運動の公式に当てはめることにより、落下運動を理解する。	
	6	力のつりあい	力の概念と力の合成・分解を学ぶ。 力のつりあいを理解する。	力はベクトル量であることを説明し、力の合成・分解について理解する。 三角比・三角関数にも触れる。 力のつりあいを考察する。	
	7	(期末考査)			

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
二 学 期	9	運動の法則	力が働くと物体の運動の様子が変化することを学ぶ。	さまざまな現象を通して、運動の三法則（慣性、作用反作用、運動方程式）を学習していく。	問題集の問題を解くことができる。
	10	(中間考査) 仕事と力学的エネルギー	仕事をする量として、エネルギーを定義する。 力学的エネルギー保存の法則を理解する。	仕事とエネルギーの関係を（エネルギーの原理）について理解させる。運動エネルギー・位置エネルギーについて理解する。力学的エネルギー保存則を導く。そしてこの法則を利用して解析できる運動について考えていく。	
	11	熱とエネルギーの変換と保存	熱と温度と仕事の関係を知る。	熱と温度の概念を知り、熱と仕事の関係を理解する。	
	12	(期末考査)			
三 学 期	1	波の性質と音	波の概念、横波・縦波の定義を知る。	波の伝わるしくみ・波動を表す要素について学ぶ。横波と縦波の違いを理解する。	問題集の問題を解くことができる。 注：電気・磁気は中学での学習内容とほぼ同じなので、自学・自習が可能である。
	2		日常生活とも関連の深い音波について波動としての現象を理解する。	発音体の振動と共鳴・共振について実験などで具体的に現象を示しながら理解する。	
	3	(学年末考査)			

その他（履修上の留意点・大学等進学のための学習など）

興味・関心を高めるように工夫されたパワーポイントを用いて授業を進める。その中に、実験観察映像を取り込んで提示していくが、極力「演示実験」（教卓等目の前で見せる実験）を行う。また、「共通テスト」レベルの問題に対応できるように、問題演習等を行っていく。なお、電気・磁気は2・3年次の「物理」で詳しく学ぶが、「物理」を選択せずに、物理基礎で受験する生徒には、個別に対応する。

とにかく、授業に積極的に参加することが楽しく物理を学ぶコツである。

科目名	単位数	指導学年・類・型	必修・選択
化学基礎	2	1 類・1 年	必修
授業担当者	教科書名	副教材等	
****	新編「化学基礎」(東京書籍)	ニューサポート新編化学基礎 (東京書籍)	

科目の到達目標

自然、特に化学的な事物・現象に関する観察・実験などを通して、自然に対する関心や探求心を高め、化学的に追求する能力と態度を育てるとともに、物質の成り立ちを中心に、化学の基本的な概念や原理・法則を理解し、科学的な見方や考え方を養う。

評価の観点と方法について

『知識・技能』教科書に出てくる最重要単語や基礎的知識を理解できているか、ノートやワークの演習問題、小テスト、定期考査で評価する。

『思考・判断・表現』基礎知識やさまざまな分野の内容を繋ぎ、実験場面の問題や応用問題を解答できるかどうかで評価する。

『主体的に学習に取り組む態度』授業やグループ活動での態度、提出物の内容で評価する。

各学期の評価は定期考査の点数を8割、小テストやノート・問題集などの提出物を2割とし、これ以外にも±10 点の範囲内で、授業態度についても考慮する場合がある。

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
一 学 期	4	1 編 化学と人間生活	化学の基本的な実験操作や物質を探究する方法を身に付ける。	我々の身の回りの様々な物質は、純物質の集まりであることを理解する。 探究活動「水性サインペンの色素を分離してみよう。」	身の回りの物質を純物質と混合物に分類できるか。分離の実験操作を理解しているか。 元素記号・元素名が覚えられているか。
		<u>1 章 化学とは何か</u>			
		<u>2 章 物質の成分と構成元素</u>			
	5	1 節 物質の成分			
		2 節 物質の構成元素			
		3 節 物質の三態			
	6	2 編 物質の構成	物質の構成粒子を観察・実験を通して探究し、基本的な概念を理解し、物質について微視的な見方が出来るようになる。	物質を構成する原子・分子・イオンなどの構造や性質を理解する。 物質の基本的成分である元素に見られる規則性について、原子の構造から学習する。 探究活動 「原子番号と元素の性質に規則性などがあるか考えよう」 物質を構成する基本的な粒子の結合のしくみと物質の性質との関係を理解する。	原子・分子・イオンの存在とその表し方を理解しているか。 組成式がつくれるか。 原子の構造を理解しているか。 化学結合のしくみが理解できているか。
		<u>1 章 原子の構造と元素の周期表</u>			
		1 節 原子の構造			
		2 節 電子配置と周期表			
		<u>2 章 化学結合</u>			
		1 節 イオンとイオン結合			
		2 節 分子と共有結合			
	7	3 節 金属と金属結合			
		4 節 化学結合と物質の分類			
		期末考査 16h 程度			

二 学 期	9	3 編 物質質量と化学反応式			
	10	1 章 物質質量と化学反応式 1 節 原子量・分子量・式量 2 節 物質質量 3 節 溶液の濃度 4 節 化学反応の表し方 5 節 化学反応式の表す量的関係	物質の量を表す概念として物質質量「モル」を導入、原子量・分子量・式量と物質質量とを関係付けられるようになる。 化学反応における物質の量的関係を理解する。	原子・分子・イオンなど微粒子の質量の表し方を理解するとともに、化学変化の表し方、そのときの物質の量的関係について学習する。 探究活動「1 円玉からアボガドロ数を確かめてみよう」	物質の量を、粒子の個数に基づく物質質量「モル」で扱うことができるか。 物質質量と他の量単位とを関係付けられるか。 化学反応式がかけられるか。 化学反応式の係数が表す意味を理解し、化学変化の量的関係が理解できているか。
	11	2 章 酸と塩基 1 節 酸と塩基 2 節 水素イオン濃度と pH 3 節 中和反応と塩の生成 4 節 中和滴定	酸と塩基の反応の概念を理解し、酸と塩基の強弱、pH、中和反応とその量的関係について理解する。	酸と塩基の定義を理解し、身近な物質を扱い酸と塩基の基本的な性質について学習する。 酸と塩基の強弱と電離度の関係を学習する。 身近な物質を扱い pH について学習し、pH の求め方を理解する。 酸性雨についても触れる。 中和反応とその量的関係を理解し、中和滴定の操作について学習する。	酸と塩基の定義、その性質が理解できているか。 強酸・弱酸、強塩基・弱塩基が理解できているか。 pH が求められるか。 中和反応の定義、量的関係を理解し、計算によって酸・塩基の濃度などが求められるか。 中和滴定の操作方法を理解しているか。
	12	期末考査 22h 程度			
三 学 期	1	3 章 酸化還元反応 1 節 酸化と還元 2 節 酸化剤と還元剤	酸化・還元が電子の授受で説明できることを理解し、それが身の回りの多くの化学変化と関係していることを理解する。	電子の授受による酸化・還元の定義を学習し、酸化の程度を示す酸化数について学ぶ。 酸化還元反応は、酸化剤・還元剤の反応であることを理解する。	電子の授受による酸化・還元の定義を理解できているか。 酸化数が求められ、酸化数を用いて酸化還元反応が説明できるか。
	2	3 節 金属の酸化還元反応 4 節 酸化還元反応の応用		金属のイオン化傾向について学習する。 観察実験「金属の陽イオンへのなりやすさを調べて、その関係性を見いだしてみよう」 電池のしくみについて理解する。	酸化還元反応は、酸化剤・還元剤の反応であることを理解できているか。 イオン化列を覚え、イオン化傾向が金属の反応性と密接な関係があることを理解しているか。 電池のしくみが理解できているか
	3	学年末考査 12h 程度			

その他（履修上の留意点・大学等進学のための学習など）

随時、演習や小テストを行い、2 年次・3 年次で履修する化学の基礎を築く。そのためにも復習や課題を確実に行うこと。分からないことがあれば、そのままにせず、すぐに質問に来ること。

科目名	単位数	指導学年・類・型	必修・選択
化学基礎	2	1年3類	必修
授業担当者	教科書名	副教材等	
****	新編 化学基礎 (東京書籍)		

科目の到達目標
自然、特に化学的な事物・現象に関する観察・実験などを通して、自然に対する関心や探求心を高め、化学的に探求する能力と態度を育てるとともに物質の成り立ちを中心に、化学の基本的な概念や原理・法則を理解し、科学的な自然観を育成する。

評価の観点と方法について
成績は、定期考査を80点に換算し、20点は平常点（各種提出物、小テスト等）で100点満点とする。
知識・技能については、基礎知識の理解度等で評価する。
思考・判断・表現については、発展的内容を習得できているか等で評価する。
主体的に学習に取り組む態度については、提出物の内容や授業態度等で評価する。

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
一 学 期	4	1編 化学と人間生活	化学の基本的な実験操作や物質を探究する方法を身に付ける。 物質の構成粒子を観察・実験を通して探究し、基本的な概念を理解し、物質について微視的な見方が出来るようになる。	我々の身の回りの様々な物質は、純物質の集まりであることを理解する。 探究活動「混合物の分離」 物質を構成する原子・分子・イオンなどの構造や性質を理解する。 物質の基本的成分である元素に見られる規則性について学習する。 探究活動「硫黄の同素体」 物質を構成する基本的な粒子の結合のしくみと物質の性質との関係を理解する。	身の回りの物質を純物質と混合物に分類できるか。分離の実験操作を理解しているか。 元素記号・元素名が覚えられているか。 原子・分子・イオンの存在とその表し方を理解しているか。 組成式がつくれるか。 原子の構造を理解しているか。 化学結合のしくみが理解できているか。
	5	1章 化学とは何か			
		2章 物質の成分と構成元素			
	6	2編 物質の構成			
		1章 原子の構造と周期表			
	7	2章 化学結合			
		期末考査			

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
二 学 期	9	3編 物質の変化 1章 物質と化学反応式	物質の量を表す概念として物質質量「モル」を導入、原子量・分子量・式量と物質質量とを関係付けられるようになる。 化学反応における物質の量的関係を理解する。	原子・分子・イオンなど微粒子の質量の表し方を理解するとともに、化学変化の表し方、そのときの物質の量的関係について学習する。	物質の量を、粒子の個数に基づく物質質量「モル」で扱うことができるか。 物質質量と他の量単位とを関係付けられるか。 化学反応式がかけられるか。 化学反応式の係数が表す意味を理解し、化学変化の量的関係が理解できているか。
	10				
	11	2章 酸と塩基	酸と塩基の反応の概念を理解し、酸と塩基の強弱、pH、中和反応とその量的関係について理解する。	酸と塩基の定義を理解し、身近な物質を扱い酸と塩基の基本的な性質について学習する。 酸と塩基の強弱と電離度の関係を学習する。 身近な物質を扱いpHについて学習し、pHの求め方を理解する。酸性雨についても触れる。 中和反応とその量的関係を理解し、中和滴定の操作について学習する。 探求活動「中和滴定」	酸と塩基の定義、その性質が理解できているか。 強酸・弱酸、強塩基・弱塩基が理解できているか。 pHが求められるか。 中和反応の定義が理解できているか。 中和反応の量的関係を理解し、計算によって酸・塩基の濃度などが求められるか。 中和滴定の操作方法を理解しているか。
	12	期末考査			
三 学 期	1	3章 酸化還元反応	酸化・還元が電子の授受で説明できることを理解し、それが身の回りの多くの化学変化と関係していることを理解する。	電子の授受による酸化・還元の定義を学習する。 酸化の程度を示す酸化数について学ぶ。 酸化還元反応は、酸化剤・還元剤の反応であることを理解する。 金属のイオン化傾向について学習する。 観察実験「イオン化傾向」 電池のしくみについて理解する。 観察実験「様々な電池」	電子の授受による酸化・還元の定義を理解できているか。 酸化数が求められ、酸化数を用いて酸化還元反応が説明できるか。 酸化還元反応は、酸化剤・還元剤の反応であることを理解できているか。 イオン化列を覚え、イオン化傾向が金属の反応性と密接な関係があることを理解しているか。 電池のしくみが理解できているか。
	2				
	3	学年末考査			

その他（履修上の留意点・大学等進学のための学習など）

随時、演習や小テストを行い、化学の基礎を築く。そのためにも復習や課題を確実に行うこと。分からないことがあれば、そのままにせず、すぐに質問に来ること。

科目名	単位数	指導学年・類・型	必修・選択
生物基礎	2	2類・1年	必修
授業担当者		教科書名	副教材等
****		東京書籍「生物基礎」	ニューグローバル生物基礎（東京書籍） フォトサイエンス生物図録（数研出版）

科目の到達目標 日常生活や社会との関連を図りながら生物や生物現象への関心を高め、目的意識をもって観察実験などを行い、生物学的に探究する能力と態度を身につけるとともに、生物学の基本的な概念や原理・法則を理解し、科学的な見方や考え方を養う。

評価の観点と方法について					
・ 授業中の発言や発表などの態度と課題やノート等の提出物とともに、生物や生命現象に対する関心・意欲を評価する					
・ 定期考査で「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点別学習状況の評価を行う。					
・ 小テストや課題テストを適宜実施し、平常点として加算する。					
・ 定期考査の点数を8割、小テストやレポートなどの提出物を2割として各学期の評価とする。					
	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
一学期	4	第1編 生物の特徴 <u>生物の特徴と多様性</u> 1節 生物の多様性 2節 生物の共通性 3節 細胞の特徴	・生物の特徴について、生物の共通性と多様性を理解するとともに、それらの観察・実験などに関する技術を身につける。さらにそれを通して生物の共通性と多様性を見出して表現する。	・地球上のさまざまな環境には、多種多様な生物が生息しており、生物は多様であることを理解する。 ・DNAをもつことが生物に共通してみられる特徴であることを確認する。 ・共通の祖先が長い年月の間に変化して、生物が多様化したことを理解する。	※観察・実験等を行い、レポートを書く。観察・実験に対する姿勢、予想や考察、器具の操作、報告書などから評価する。評価の観点のうち、思考・判断、観察・実験の技能・表現に関する配分が大きい。
	5	<u>生物とエネルギー</u> 1節 生体とATP 2節 生体内の化学反応 3節 呼吸と光合成	・上記について、主体的に関わり、科学的に探究しようとする態度と生命を尊重し、自然環境の保全に寄与する態度を養う。	・真核細胞において、核・細胞膜・細胞質基質・ミトコンドリア・葉緑体・液胞・細胞壁の機能の概要を理解する。 ・光エネルギーがなければ植物は生育し続けることができないことを示した資料から、生命活動にエネルギーが必要であることを理解する。 ・代謝には同化と異化があること、また、代謝に伴うエネルギーの移動にはATPが関わっていることを理解する。 ・ATPの役割を資料から読み取ることができる。 ・酵素の基本的な特徴について理解する。 ・肝臓片に含まれるカタラーゼを用いて実験を行い、酵素の触媒作用を確認する。	
	6			・遺伝子とDNAと染色体の関係について理解する。	
	7	第2編 遺伝子とその働き <u>遺伝情報とDNA</u> 1節 生物と遺伝子 2節 DNAの構造 3節 DNAの複製と分配	生物と遺伝子について理解するとともに、それらの観察・実験などに関する技術を身につける。さらにそれを表現する。	・DNAの塩基の相補的な結合を示した資料から、DNAの構造の特徴を見だし、DNAの基本的な構造を理解する。 ・塩基の相補性にもとづいてDNAが複製されていることに気づき、半保存的複製を理解する。 ・分裂している細胞には細胞周期があることを理解する。 ・生体内には多種多様なタンパク質が存在し、酵素などとしてさまざまな働きをしていることを理解する。 ・DNAの塩基配列と、その配列で決定されるアミノ酸配列	

二 学 期		遺伝情報とタンパク質 1節 タンパク質 2節 DNA とタンパク質の合成 3節 細胞分化と遺伝子	・上記について、主 体的に関わり、科学 的に探究しようと する態度と生命を 尊重し、自然環境の 保全に寄与する態 度を養う。	を示した資料から、この2つの配列の関係について考察 し、3つの塩基の並び（コドン）が1つのアミノ酸に対 応していることを理解する。 ・DNA の塩基配列がmRNA の塩基配列に写し取られ（転写）、 これがアミノ酸配列に置き換えられる（翻訳）という流 れを理解し、遺伝暗号表をもとに、ある mRNA が指定す るアミノ酸配列を考察できる。 ・恒常性と体液の種類について理解する。 ・脳幹の働きと、脳死がどのような状態であるのかについ て理解し、自律神経についても理解を深める。 ・内分泌系による調節の特徴について理解する。 ・ホルモン分泌のフィードバック調節について、理解する。 ・健康なヒトとインスリンを正常に分泌できないヒトの食 事の前後の血糖濃度とインスリン濃度の経時的变化を 示す資料から、インスリンの働きを考察し、理解する。 ・血糖濃度調節の流れを示した資料から、血糖濃度と自律 神経系の関わりについて気づき、血糖濃度調節のしくみ について理解する。 ・皮膚や粘膜による生体防御・自然免疫を理解する。 ・抗体の特徴について理解する。 ・リンパ球による抗原認識、免疫寛容のしくみを理解する。 ・獲得免疫による病原体排除の流れを理解する。 ・一次応答と二次応答における抗体生産量の変化を示した 資料をもとに、同じ感染症にかかりにくい理由を考察 し、二次応答や拒絶反応が起こるしくみも理解する。 ・森林には階層構造がみられ、階層によって光などの環境 が異なることを理解する。 ・光の強さと光合成速度の関係を理解する。 ・陽生植物、陰生植物の光合成速度の特徴を理解する。 ・植生は不変ではなく、遷移していることを理解する。 ・伊豆大島で行われた溶岩の噴出年代が異なる地点の植 生環境調査の結果をもとに遷移の進む要因を考察する。 ・湿性遷移、二次遷移について理解する。 ・バイオームの概念を理解し、陸上にはその地域に生育す る植物を基盤としたさまざまなバイオームが成立するこ とを理解する。 ・地球上には、それぞれの場所に適応した植物が生育し、 いろいろなバイオームが成立していることを理解する。 ・食物連鎖を通じて間接的に他の生物に影響を与えること があることを理解する。	※授業に対する 姿勢、学習態度、 生物への関心等 で判断する。評 価の観点のう ち、特に関心・ 意欲・態度の項 目を評価する。 ※各問題への取 り組み、取り組 んだ内容から評 価する。
	9	ヒトの体の調節 体内環境と情報伝達 1節 体内環境 2節 神経系による情報伝達	・神経系・内分泌 系・免疫について理 解するとともに、そ れらの観察・実験な どに関する技術を 身につける。さらに それを表現する。		
	10	3節 ホルモンによる情報伝達 4節 血糖濃度の調節	・上記について、主 体的に関わり、科学 的に探究しようと する態度と生命を 尊重し、自然環境の 保全に寄与する態 度を養う。		
	11	免疫のはたらき 1節 免疫のはたらき 2節 免疫記憶 3節 免疫とさまざまな疾患	・植生と遷移、生態 系とその保全につ いて理解するとと もに、それらの観 察・実験などに関す る技術を身につけ る。さらにそれを表 現する。		
	12		・上記について、主 体的に関わり、科学 的に探究しようと する態度と生命を 尊重し、自然環境の 保全に寄与する態 度を養う		
三 学 期	1	生物の多様性と生態系 第1章 植生と遷移 1節 植生とその環境 2節 植生の遷移 3節 遷移とバイオーム	・上記について、主 体的に関わり、科学 的に探究しようと する態度と生命を 尊重し、自然環境の 保全に寄与する態 度を養う		
	2	第2章 生態系と生物の多様性 1節 生態系における生物の多様性 2節 生態系における生物間の関係 3節 生態系と攪乱	・上記について、主 体的に関わり、科学 的に探究しようと する態度と生命を 尊重し、自然環境の 保全に寄与する態 度を養う		
	3	4節 生態系の保全			

その他（履修上の留意点・大学等進学のための学習など）

生物は暗記科目だと思われがちだが、教科書を丸暗記するのではなく、生物の現象の中で個々の知識を関連付けていく事が肝要である。生物基礎の内容自体は難しいものではないが、暗記一辺倒の学習では入試で太刀打ちできないことは間違いない。また、「大学入学共通テスト」では「思考力・判断力・表現力」が重要視されている。何事でも同じであるが日々の積み重ねを怠らないようにして欲しい。

科目名	単位数	指導学年・類・型	必修・選択
地学基礎	2	1年1類	必修
授業担当者	教科書名	副教材等	
****	地学基礎 新課程 (第一学習社)	ネオパルノート地学基礎 (第一学習社)	

科目の到達目標
地学（地球科学）は、原子・分子レベルの知識から気象、地球の構造・変動、宇宙、生物の変遷（進化）まで、その内容は多岐にわたるビッグサイエンスである。その見地から自然界を巨視的に俯瞰し、これからも起こるであろう地震や気象災害に備えることが重要である。また、人類共通の課題である地球温暖化などの環境問題についても学び、解決方法について考えてほしい。

評価の観点と方法について
定期考査は基本的内容が理解できているかを調べることであり、評価の 80%は定期考査の点数とする。残りの 20%の評価は平常点とし、授業ノート・問題集の提出を評価する。（平常点最大 30%、定期考査 70%で評価する場合もある）これ以外にも±10 点の範囲内で、授業態度についても考慮する場合がある。

	月	学習単元・項目	学習のねらい	評価のポイント
一 学 期	4	1 章 地球のすがた <u>1 節 地球の概観</u> 1 地球の形と大きさ 2 地球の形の特徴と大きさ 3 章 大気と海洋 <u>1 節 地球のエネルギー収支</u> 1 大気の構成と特徴① 2 大気の構成と特徴② 3 対流圏における水の変化 4 太陽放射と地球放射 5 地球を出入りするエネルギー 中間考査行わず	- 地球の形と大きさの測定の歴史について学習する。 (野外観察で地球の大きさを体感する) - 地球の形や地表の姿について学習する。	- 授業中の興味、関心、態度 - 単元ごとにワーク提出
	5	3 章 大気と海洋 <u>1 節 地球のエネルギー収支</u> 1 大気の構成と特徴① 2 大気の構成と特徴② 3 対流圏における水の変化 4 太陽放射と地球放射 5 地球を出入りするエネルギー 中間考査行わず	- 大気の組成と圧力、大気圏の構造について学習する。 - 大気中の水の変化について学習し、対流圏で起こる現象を理解する。 - 太陽放射と地球放射の相互作用について理解する。 - 大気のエネルギー収支について理解し、大気の温室効果について考察する。 - 緯度ごとのエネルギー収支を学習し、地球における南北のエネルギーと熱の輸送について理解する（ハドレー循環、海流、深層循環など）	ノート提出
	6	3 章 大気と海洋 <u>2 節 大気と海水の運動</u> 1 エネルギー収支の緯度分布 2 風 3 大気の大循環① 4 大気の大循環② 5 海洋の構造 6 海洋の大循環 7 エルニーニョ現象とラニーニャ現象 期末考査を実施	- 風の吹く仕組みについて理解する。 - 太陽放射と地球放射のバランスが風の流れを生み出し、地球規模の大気の大循環が起こる仕組みについて理解する。 - 海水の温度と組成について学習し、海洋の層構造を理解する。 - エルニーニョ現象とラニーニャ現象と人間生活に及ぼす影響について学習する。	- ノート提出 - 期末考査

	月	学習単元・項目	学習のねらい	評価のポイント
二 学 期	9	1 章 地球のすがた <u>1 節 地球の概観</u> 2 章 地球の活動 3 地球の内部構造 4 地球の内部の動き 5 地殻を構成する岩石 <u>2 節 火山活動</u> 1 火山の分布 2 火山の形成とマグマ 3 火山の噴火 4 火山の地形 5 火成岩の形成 6 火成岩の種類 <u>2 節 プレートの運動</u> 1 プレートの分布と運動 2 プレートの境界 3 地殻の変動と地質構造 4 変成作用 5 大地形の形成 <u>中間考查行わず</u>	- 地球内部の層構造、地殻やマントル、核を構成する物質について学習する。 - プレートの分布と運動について学習する。 - プレートの境界の特徴について学習する。 - 断層の形式と褶曲について学習する。 - 変成作用と変成岩について学習する。 - 大地形の形成とプレートテクトニクスについて学習する。 - 世界及び日本の火山の分布について学習する。 - 火山の形成について学習する。 - 火山噴出物と火山の噴火について学習する。 - 火山の形について学習する。 - 火成岩の産状と組織、火山岩と深成岩の違いについて学習する。 - 火成岩のおもな造岩鉱物の特徴を学習し、火成岩の分類について理解する。	- 授業中の興味、関心、態度 - 単元ごとにワーク提出
	10	5 章 生物の変遷と地球環境 <u>1 節 地層と化石</u> 1 地層の形成 2 地層の重なりと広がり 3 堆積岩 4 化石と地質時代① 5 化石と地質時代② <u>2 節 地球と生物の変遷</u> 1 先カンブリア時代① 2 先カンブリア時代② 3 古生代① 4 古生代② 5 中生代 6 新生代① 7 新生代② <u>期末考查を実施</u>	- 風化と河川の働きについて学習する。 - 様々な化石のでき方、示相化石と示準化石、相対年代と数値年代について学習する。 - 地質年代の区分について学習する。 - 先カンブリア時代から新生代第四期までの地球と生物の変遷について学習する。特に、それぞれの主役となる植物、動物、時代区かわる大きな出来事について学習する。	ノート提出
	11			
	12			- ノート提出 - 期末考查
三 学 期	1	4 章 宇宙と地球 <u>1 節 宇宙と太陽の誕生</u> 1 宇宙の探求 2 宇宙の始まり① 3 宇宙の始まり② 4 太陽の誕生 5 太陽の活動 <u>2 節 太陽系と地球の誕生</u> 1 太陽系の構造 2 太陽系の誕生① 3 太陽系の誕生② 4 太陽家の惑星 5 生命の惑星地球 <u>学年末考查を実施</u>	- 宇宙の探求の歴史について学習する。 - 宇宙の始まり、銀河系の構造について学習する。 - 太陽の誕生過程やエネルギー源について学習する。 - 太陽の表面や外層における活動について学習する。 - 太陽系の構造と誕生過程について学習する。 - 太陽系の惑星の特徴について学習し、その違いの要因を理解する - 地球に生命が存在する理由について学習する。 【以下の項目については、関連する単元で適宜に扱います】	- 授業中の興味、関心、態度 - 単元ごとにワーク提出
	2			- ノート提出 - 学年末考查
	3	6 章 地球の環境 <u>1 節 地球環境の科学</u> 1 気候変動 2 地球温暖化による変化 3 オゾン層の変化 <u>2 節 日本の自然環境</u> 自然の恩恵 季節の変化 気象・地震・火山災害と防災		